

# 大友氏の歴代墳墓を巡る (三)

古藤田 太

(会員・弥生町江良)

## 四 第二十代 大友義鑑

天文十九年庚戌二月十二日 従四位下左近衛少

将兼修理大夫源義鑑卒有其事年四十九、号到明

寺松山紹康(大友家文書録)

墓は大野郡野津町寺小路(国道十号線沿い)

大友義鑑について述べることは実に多いのであるが、戦国時代という非常な時代の血なまぐさい話ばかり多く、文化の話は全くといって、程出ないのが残念である。

父義長は病弱であったといわれても祖父親治と共に賢明な大友家督として、本編の主人公義鑑と共に大友氏繁栄の基礎を築き、守護大名から戦国大名として成長していった。

この義鑑については、余りにも知られている人物だけに、佐伯に関係深い菊池義宗、佐伯惟治を中心にのべたい。

大友義鑑が、大友家の家督を継いだのは明応七年(一四九八)、正式に幕府の承認を得て守護の地位についたのは文亀元年(一五〇一)六月というから三年もたつてからである。父義長は有名な戒の遺訓を義鑑に遺している。遺訓はよく守られ又よく伝えられたのであるが、次の一条は遂行できても失敗に終わったものであった。

### 一、肥後之国以堅固之覚悟菊法師丸入国

可被添心之事

父義長は過去に大友家の家督を争う事件が余りに多いことを想い浮べて暗然としたであろう。

姫嶽の戦、日田の乱と、父親治から生々しく聞いてい

たことだろう。義長は五郎（義鑑）の弟菊法師丸（菊池義宗）の処遇については思い煩ったことであろう。大友氏を二分する争いだけは避けねばならない。庶子の対策を考えるうち、自分の妻が肥後の菊池氏の重臣木野氏の出であることや、大友氏の被官同様並々ならぬ間柄となっていた相良家を頼りに思い、今や勢威を失ったといっても、かつての南朝方の重鎮菊池氏の家督に二男菊法師丸を送りこむことに気づき、その策謀に心を砕いたことだろう。そうなれば大友氏の「お家騒動」は起きないばかりか、肥後国を今まで以上に根底から押えて支配できることになる。これが「堅固の覚悟を以て菊法師丸が菊池氏の家督をつぐように努力せよ」ということであろうか。この菊池氏の家督継承問題は、その後容易ならざる道をたどって、大きな騒動の後、義鑑や親治が力を以て押えつけたかたちで、菊法師丸の菊池氏継承が永正十七年（一五二〇）頃実現した。

義長は永正十五年に死去しているので存命中に計画は実現できにかつたわけである。大友氏が大兵を以て、無理に送りこんだ感のあるこの菊法師丸は義宗（改名の多い人であるが以後義宗とする）となって、相良義滋の娘

を娶り、相良氏を最も頼ることとなる。義宗の肥後入りには大友氏より多勢の家臣団を伴ったが、歴史の皮肉とでも言うべきか、義長や、義鑑の意に反して、歯車は反対に廻転していった。

大友氏の家督奪還や転覆を狙う一味、大内氏、宇佐八幡永弘氏、大聖院宗心、田原親述と共に佐伯氏も一枚これに加って、菊池義宗と共に反大友の叛旗をかかげたというのである。この顔触れを見る限り「さも有りそう」な陣容である。それは天文二年から天文二十三年の久しきに亘って執拗に続けられた。

義鑑が、家督を継いだのは十三才、祖父親治の補佐をうけたであろうが、やがて義鑑は敵対する実弟を相手のそと急忙の間に大友氏の鞏固な戦国大名化を進めなくてはならなかった。

この菊池義宗が反大友の叛旗を掲ぐる一味中に佐伯惟治が加っていたと多くの学者が指摘するようになったのは最近のことのように思える。「佐伯惟治も一味徒党」について、私なりに笑止の沙汰を申述べたい。

話は応永の昔に戻るが、応永二年（一三九五）足利幕

府は諸国の地頭の中から、九州では豊後の戸次、日向の伊東、薩摩の渋谷など東国御家人出自の者及豊後の佐伯大隅の祢寝<sup>ネヅメ</sup>などの豪族合わせて三十余名（奉公衆の全体の数は多勢）が選ばれて奉公衆となった。江戸時代の旗本のようなものだともいわれ、將軍権力の拠点だとされている。（佐藤進一『室町幕府論』）

奉公衆制は足利義満の頃より確立を見たものであろう



大友義鑑の墓

が、中央にあっては將軍の警衛や親衛団を構成するほか、奉公衆が幕府の御料所をあくづかつて経済基盤ともなり、又特に注目すべきことは、守護か

ら独立して將軍に直結し、守護大名を牽制、統制して、幕府への依存性を強めるような機能を果たすことが狙いの一つであった。

然し、奉公衆体制の実質的崩壊が、足利將軍権力の衰微没落ということに連った。（川添昭二『室町幕府奉公衆筑前麻生氏について』）このように室町幕府の支配体制の根幹に奉公衆の占むる比重は大きく、又奉公衆は忠功的な人格関係で深く將軍と結ばれていた。渡辺澄夫『大分の歴史』にみても奉公衆と將軍との関係は「永久的関係」とされているが、忠功的精神で貫かれたものと思う。又奉公衆は佐伯氏の外に戸次 日田 田原 吉弘氏も入ると列挙されている。後年、大友氏に敵対する田原、佐伯氏等が揃って奉公衆であったことは注目に値すると思う。

時代の降るに従い奉公衆の崩壊が進み、又將軍権力が弱体化してゆき、明応二年（一四九三）頃には奉公衆も將軍近侍の小集団にすぎなくなったが、かつての佐伯、田原といった奉公衆は忠功の精神を以て結ばれた同志として、常に気脈を通じ合っ、守護大友氏に対抗し続ける存在であったと考えたい。又反大友陣営に加担し易い

体質を受け継いでいると考えられないだろうか。その好例は幾つもあるように思う。

菊池義宗が反大友の旗幟を掲げたのは天文二年（一五三三）からで、佐伯惟治が柵牟礼城に大友氏の討伐を受けたのは大永七年（一五二七）であるから両者の謀議は随分早くからすゝめられていたものであろう。

佐伯惟治が、菊池義宗、田原親述といった武将と謀叛に参加するということは惟治なる人物が高く評価される武将でもあったように思う。『大友興廢記』等の野史に僧春好について魔法を修練することが真実とすれば、謀叛発覚を豫防する措置であったかと考えるべきではあるまいか。義鑑の惟治討伐は戦国大名に成長するため避けて通れない一つの過程であった。

つい十年前程前の永正十三年（一五〇六）に、大友義鑑の弱輩家督を好機として大聖院、永弘、田原氏が陰に加った朽網親満の乱が勃発した。大友氏にとって、義鑑にとって浮沈をかけた大戦であったと田北学先生は説いている。この戦乱の鎮定で家臣団の整備に自信を深めたと思う。

朽網氏は直入郡久住町都野附近を本領として、広大な

所領は直入玖珠方面に多かった。加判衆を勤むる名門の名門で勢力強大であっただけに、その討伐は義鑑にとって真に意義深いものであったに違いない。

親満の大乱から僅かに三年後、大友氏の加判衆であった日出の大神親照が一族七十五人と共に府内來迎寺に於て義鑑の手によって殺された。所領や勢力が宇目方面まで伸びて強大となっていたと思われる佐伯惟治は、これ又除かねばならない武将であった。

この惟治討伐は、大友内部で早くから計画されていた。かつて奉公衆として、迷惑な存在であった佐伯氏を亡ぼす準備は綿密に練られていたと思われる。

中国の雄大内義興は、尼子経久との戦いに当時和平が保たれていた大友氏に援兵の派遣を要請してきた。大友氏は大永三年（一五二三）、大永六年、大永七年七月の三回に亘って、安芸石見方面に援助の兵を送ったのである。大友史料によると鶴崎、国東、大野郡方面の士が多く動員されたが、佐伯氏動員の形跡はなく、寧ろ佐伯氏の動きに対応できるような義鑑の残留部隊があったように思う。

しかし義鑑によって強大なる者は除かれることにな

ったのである。『樺牟礼実録』によると、樺牟礼戦の開  
始される以前から惟治退治の噂が府内の巷に流れていた  
ということであるから、早くから菊池義宗達との謀叛は、  
義鑑の目聞、耳聞の諜報網に探知されていたものである  
う。

大軍を以て攻め立てる臼杵長景に、惟治も降伏して日  
向に落ちて行った。謹かの部下、『延陵世鑑』は数名、  
他の野史は二十数名とあるのが普通のように思うが、妻  
子もこれに従ったと思われるのは伝承でもあるが、佐伯  
氏系図に娘の一人は「三川内氏室」となっているからで  
ある。確証とてないが、一度可愛岳に行き何故か三川内  
に引返した模様、自刃した三川内の橋ヶ谷の現場を見て  
思うことは、何故あの峻しい山中に遁棲したか、自刃場  
所から山を登ればすぐに山の尾根に出る。この尾根から  
は海が見え、古江の町もそこに見える。惟治一行が三川  
内入りした目的は四国行きであったと思う。丸市尾で漁  
夫頭市右衛門に四国行きの船を交渉した話があるが、こ  
れが真実に近いのではあるまいか。

大友義鑑の戦国大名化は家臣の完全支配と農民の直接  
支配にある。強大を誇る武將を次々に屠って憂なき家臣

団の編成ができあがったとき、大友、大内の決戦は勢場  
原で行われ、大友の勢威は高まった。

然し義鑑の覇業も天文十九年（一五五〇）二月の「二  
階崩れの変」によって終止符が打たれると、義鎮が大友  
第二十一代家督となって、この事変の元凶は入田親誠で  
あるとして、義鎮に攻められた入田親誠は阿蘇の義父阿  
蘇惟豊を頼って遁れたが、惟豊は親誠の首を打って義鎮  
に届けたというのが普通であった。

しかし大友史料によると、家督となった義鎮は菊池義  
宗に宛てた書状の一節に、「義宗が将来安全を願うなら  
ば「叛逆者入田親誠父子の落所を通報し、麾下の战斗中  
止を命令せよ」とある。史料による限り親誠は生きてい  
る。然し、義宗が「大友二階崩れ」に関係し、加担して  
いることを示すこともある。

歴史の史実を攔むことは如何にむづかしいことである  
か、このことはよく教えてくれるようである。

菊池義宗は、父義鑑以上に強硬なしかも再三に亘る義  
鎮の召還の申出に応ずる覚悟を決めて、妻子を相良家に  
残し、長子高鑑を伴って天文二十三年（一五五四）冬、  
大友軍屯所竹田に向った。義宗は、これまでの叛逆を頻

りに謝罪したが、今に及んで義鎮は赦さなかった。その夜、強盗が押入った態で「布団蒸し」で殺害した。

私は義宗が召還に應じてたどったであろう山道を通る度に、当時としては既に五十一才の高齢を迎えた義宗が

長子を連れて落葉を踏み、黙然と歩く衰れた姿を想う。義宗の墓は竹田市法泉庵に在るが、かつて小さな坂が重なるようにして続くこの墓地を訪れた時、往時を偲び、こみ上ぐる涙と共に低回去る能はざりし思い出がある。  
(つづく)

## 杉谷遠江守宗故の墓の由来

本文 榎木野 次 人

前文 塩 月 佐 一

### 杉谷宗故の墓を尋ねて

塩 月 佐 一

昨年の晩秋、軸丸会員の案内で、清田副会長・染矢会

宗故の墓は、小高い杉林の中にただ一つ、高く苔むして、由緒ありげに建っていた。「佐伯氏の忠臣が、故郷を遠く離れて一人淋しくここに眠るのか」と思うと感慨無量であった。

員と編者は、遠く阿蘇外輪山の高原、波野村榎木野に杉谷宗故の墓を尋ねた。

杉谷宗故のことは『大友興廢記』の巻第二に出ている。

沿道には、あちこちに取り残された柿が赤く輝き、高原はもう枯草でおおわれていた。

宗故が波野村に落ちたのは、佐伯惟勝・惟常の兄弟げんかに由来する。『佐伯市史』によると、惟勝・惟常は佐

石造物を尋ねて九州中を駆け廻る軸丸氏は、波野村もまるで我が村のように車を走らせる。

伯氏第十代惟治の兄惟信の子といわれ、この二人は仲が悪く、永正（一五〇四—一五二一）惟治が自刃をする